

## 神になつた歌人菅原道真の和歌

——『続後撰集』から『統古今集』へ——

山口 正 代

はじめに

菅原道真の和歌は勅撰和歌集に三十五首採られている。『古今集』二首(272・420)、『後撰集』三首(57・1356・1357)、『拾遺集』五首(479・480・1006・1216)、『新古今集』十六首(461・1441・1442・1449・1690・1701)、『続後撰集』三首(57・88・1088)、『統古今集』三首(688・690・709)、『玉葉集』一首(2744)、『新拾遺集』一首(1385)、『新統古今集』一首(2079)である。

武井和人氏はこれらを詞書によって三つの層に分類し、

A (1) 古今集・後撰集

(2) 拾遺集

B 新古今集・続後撰集

C 統古今集・玉葉集・新拾遺集・新統古今集<sup>1)</sup>

次のように説明している。

Aの詞書は、比較的長文で具体的に詠作事情がはつきりと分か

る。ただ、A(1)では、まだ(配流)の側面がほとんど見えな  
が、A(2)の『拾遺集』に至って初めて現れる。Bは、題しらす  
が2首あるものの、他は概ね一字題であつて、且つ内容は(述  
懐)である。Cになると、神祇歌であり、従つて詞書も左注と  
なつてゐる。<sup>2)</sup>

武井氏が既に指摘しているように、A・Bの間隔があきすぎてい  
ること、BからCへの変化が急であるということが問題点になる  
であろう。ここでは特に、BからCへの変化の部分で、『続後撰集』  
(一二五一年成立)から『統古今集』(一二六五年成立)までの十四  
年間に、道真の歌について何が起こつたのかを中心に考察してみたい。

### 一 『続後撰集』における道真歌

『続後撰集』は二十卷、第十番目の勅撰集である。後嵯峨院の命  
により、藤原為家撰。宝治二年(一二四八)七月二十五日の下命よ  
り三年五か月を要し、建長三年(一二五二)十二月に完成奏上され  
た。総歌数一三六八首。部立は春歌上中下・夏歌・秋歌上中下・冬  
歌・神祇歌・釈教歌・恋歌一―五・雑歌上中下・鬻旅歌・賀歌であ  
る。つまり、『続後撰集』には部立として「神祇歌」が立てられてい  
ながら、道真歌三首はそこに収められなかつたということになる。

それでは、『続後撰集』の道真歌がどの部立に収められているかに  
注意しながら歌を見ていくことにしよう。まず「巻第二、春歌中」

に次の二首が見える。

帰雁を

菅贈太政大臣

57 かりがねのあきなくことはことわりぞかへる春さへなにかかな

しき

題しらず

菅贈太政大臣

88 けささくらことに見えつるひとえだはいほのかきねの花にぞあ

りける

あともう一首は「巻第十六、雑歌上」に、

萩を

菅贈太政大臣

1088 まどろまずねをのみぞなくはぎの花いろめく秋はずぎにしも

のを<sup>3</sup>

とある。時代的に見ても、天神信仰は既にあるので『続後撰集』の道真歌も「神祇歌」に収められていても不自然ではない。

それでは『続後撰集』所収の道真歌がこれ以前に、どの歌集に出していたかを見てみよう。88番歌のみが『万代和歌集』「巻第二、春歌下」に次のようにある。

題しらず

菅贈太政大臣

286 けささくらやどに見えつるひとえだはいほのかきねのはなにぞ

ありける

『続後撰集』では「ことに見えつる」であったのが、『万代和歌集』では「やどに見えつる」となっていて、異同が見られる。為家がどのような撰集資料に目を通していたかは不明であるが、『続後撰集』

88番歌については、『万代和歌集』の撰者と部類に関しては考えがほぼ一致していたと考えていいだろう。

『万代和歌集』は私撰集である。初撰本（一二四八年成立）撰者は藤原光俊（真観）、精撰本（一二四九年成立）撰者は藤原家良であり、共撰と考えられている。総歌数三八二六首。春上下・夏・秋上下・冬・神祇・釈教・恋一―五・雑一―六・賀から成る。

為家、光俊、家良は『統古今集』の撰者なのであるが、『万代和歌集』成立においても三人の関連が次のように指摘されている。

家良・真観は反御子左派歌人で、しかも本書の成立は、藤原為家が撰じた『続後撰和歌集』（宝治二年七月奉勅、建長二年冬奏覧）の撰進途中に当たり、両書の関連は微妙である。同集と一致する歌は三三九首を数える<sup>3</sup>。

要するに、『万代和歌集』と『続後撰集』の共通する歌は三三九首と多いのであるが、道真の歌について言えば一首のみ（部立も含めて）一致しているのである。また、『万代和歌集』にも部立「神祇」があるが、道真の「けささくら」の歌は「神祇歌」としては収められていないのである。

## 二 藤原為家『続後撰集』から『統古今集』へ

言うまでもなく、為家対反御子左派光俊・家良という構図が考えられ、それがそのまま『続後撰集』と『統古今集』における道真歌の扱い方の相違につながっているということも言えるであろう。ま

た、もっと簡単に言えばそれぞれの撰集資料、撰集態度の違いが現れただけということも言えるかもしれない。

『続古今集』は二十卷、第十一番目の勅撰集である。正嘉三年（一二五九）三月十六日、最初は藤原為家一人に、後嵯峨院より命が下り、弘長二年（一二六二）に、新たに藤原基家、藤原家良、藤原行家、藤原光俊が撰者に加わり、文永二年（一二六五）十二月二十一日に奏覧された。為家が撰者追加について憤慨していたことや、そのために撰歌作業を息子の為氏に任せたことは『井蛙抄』に伝えられている。

ここでもう一度整理してみよう。為家は後嵯峨院の命を受け、三年五か月の年月をかけて、一二五一年『続後撰集』を完成させた。『続古今集』は一二五九年やはり後嵯峨院の命が為家に下り、一二六二年に新たな撰者が加わった。つまり、為家にとっては、第十番目の勅撰集成立から第十一番目の勅撰集の命が下るまで、約八年間の充電期間があったとも考えられる。おそらく、この期間、前勅撰集に対する反省点なども考えていたかもしれないし、次の勅撰集に対する意気込みもわいてきていたかもしれない。そして、為家が『続古今集』の撰歌作業に入ってから新たな撰者が加わった時、既に三年の月日が流れていたのである。これは為家が『続後撰集』完成に要した期間とほぼ同じである。そうすると、『続古今集』に新たな撰者が加わった段階で、為家の作業がはたしてどこまで進んでいたかということが問題になるであろう。そこからまた三年の年月を費や

し『続古今集』は完成されたのである。『続古今集』における道真の歌の扱い方については、単純に考えれば、為家と他の撰者たちとの意見の相違ということも考えられる。また『続後撰集』から『続古今集』の間に為家自身の考え方が変わっていった可能性ももちろんあるであろう。

ここで再び目を向けたことは、『万代和歌集』と『続後撰集』の一致する歌が三三九首あるということである。これは為家のなかにも、光俊、家良に近い考え方がある程度は認められるという一つの証拠になるのではないだろうか。すなわち為家と光俊がライバル関係にあったことは既に知られているのだが、『続後撰集』と『続古今集』における道真の歌の扱い方の違いの理由を、両者の対立関係とということだけで処理してしまつてよいのかという疑問が残るのである。為家が撰歌作業の現場で、仮に放棄したようなかたちであったとしても、どの程度まで主張が認められ、彼自身が納得していたか。同じことが光俊たちにも言えるのではないだろうか。『続古今集』が複数撰者によって完成したという点を押さえておく必要があるであろう。

先に『続後撰集』の部立は確認したので、今度は『続古今集』の部立を見てみよう。春歌上下・夏歌・秋歌上下・冬歌・神祇歌・釈教歌・離別歌・羈旅歌・恋歌一一五・哀傷歌・雑歌上中下・賀歌。

『続古今集』の部立は『続後撰集』と比べると若干違いはあるのだが、四季部の後に「神祇歌」「釈教歌」と順序を同じにしている点は

重視すべきであろう。

『統古今集』の道真歌を見てみよう。「巻第七、神祇歌」に次のようにある。

688 692 などでこのうすくもこくもひくるればみむ人わきておもひ

さだめよ

689 693 竹のよもわがよもともにおいにしをくちばさやにもおける

しもかな

690 694 松のいろはにしふくかせやそめつらんうみのみどりをはつ

しほにして

この三首は北野の御歌となん

この三首が『統古今集』に収められる以前に、どの歌集に出ていたかを調べてみると、688 番歌、689 番歌が次のように見える。688 番歌は、藤原基家撰の『雲葉和歌集』（一二五三年ころ成立）「巻第四、夏歌」に

題しらず

361 などでこのうすくもこくも日くるればみん人わきておもひさ

だめよ

689 番歌は、藤原基俊撰の『新撰朗詠集』（一一〇七〜一一二三ころ成立）「下雑」に

竹

406 竹のよもわが世もともに老いにしを朽葉さやにもおけるしも

かな昔

また歌は省略するが、『雲葉和歌集』「巻第八、冬歌」788 番歌に「題不知、菅贈太政大臣」として同歌が採られている。『統古今集』の撰者たちがどのような資料を見ていたかは不明であるが、道真のこれらの歌を「神祇歌」以外の部に所収するという案もあったたであろうということとは想像できる。

「神祇歌」として『統後撰集』には五二首、『統古今集』には六二首収められている。簡単にわかる両者の違いを述べるとするならば、『統古今集』の「神祇歌」の部は

686 690 われたのむ人のねがひをてらすとてうきよにのこる三のとも

し火

これは稲荷大名神の御歌となん

というように、左注を伴う歌で始まり、それが先にあげた道真の歌三首を含みながら 693 番歌まで左注を伴う歌が続いているということである。ここで三首連続して載っているのは道真の歌だけである。『統後撰集』においては「神祇歌」部最後の 582 番歌に左注がついている。

それでは為家が『統後撰集』の「神祇歌」に道真の歌を収めようという考えはなかったのだろうか。『統後撰集』の「神祇歌」に収められている 532・541・542・549・564・574 番歌は『万代和歌集』の 1551・1585・1550・1552・1622 番歌と同歌であり、『万代和歌集』においても「神祇歌」に収められている。また、『統後撰集』538 番歌は、成立は『統後撰集』よりも後になるのであるが、慈円（一一五五—一二二五）の家集『拾玉集』（一二三四成立）2116 番歌と同歌であり、これも『拾

玉集』においては「神祇」として扱われている。このように他の歌集においても「神祇歌」に収められていて、『続後撰集』においても「神祇歌」である歌が他にも552・568・569とある。部立に「神祇」を持たない歌集もあるのも、一概には言えないかもしれないが、『続後撰集』は出典のかたちをなるべく損なわないようにしているのではないか。

### 三 『続古今集』序に書かれた道真の意味

『続古今集』が道真の歌を「神祇歌」の部に入れ、三首まとめたということは意味があつたと考えてよいと思われるが、それをはつきりと示しているのが、「真名序」(菅原長成執筆)と「仮名序」(藤原基家執筆)である。「真名序」には次のようにある。

釈門之作、神道之詠、緯在幽玄、尤貴情素、此中昌泰之右相者、絶妙之上才也、累代之集、雖加晋氏鼎臣之号、尊徳之余、今載叢祠。

また「仮名序」には、

すべては勅撰もたびかさなり、よめるともがらもかずしらざるなかに、菅丞相は延喜よりはじめてくものうへのえらびにそなはり、天曆よりあらたにみやこのきたのあとをたれしかば、松のかげをわけてみゆきかさなり、のべのくさをしのぎてたむけをむすびつつ、あさゆふにあふぎたふとびたてまつるあまり、代代の集にしろされたるあとを、このたびあらた

めとどむるならし、とある。

しかし、なぜ道真をこれほどまで意識しているのだろうか。「仮名序」にはこのような記述がある。

つぎにこの集を続古今といへることは、延喜に古今集をえらばれてのち、他の勅撰おほくへだたれども、かさねて元久に新古今と名づけらる、そのうへ古今の字をなほもちあるは、すなはちこの三たびの集をもちて、とりわきまさしきただちとあひつぎてながきよにもつたへ、ときの人にもしらしめむがためなり、かつははからざるにかの二代のあとかはらず、いまも又乙丑のとしにめぐりあひて、ときいたりことわりかなへるなるべし、すなわち『古今集』と『新古今集』がそれぞれ延喜五年乙丑、元久二年乙丑に完成したことが書かれており、そして『続古今集』も元久二年乙丑に完成したのである。また、道真は八四五年に生まれ九〇三年に亡くなつてゐるが、まさに承和十二年(八四五)道真の生まれた年が乙丑に当たるのである。おそらくこのことも撰者たちは意識していたのではないだろうか。

### 四 『続古今集』後の勅撰集における道真歌

『続古今集』後の勅撰集に採られた道真歌を確認しておこう。まず『玉葉集』(一一三二年成立)に一首見える。

卷第二十 神祇歌

2744 風はやみ波のさわぐにまがひつるちどりのこゑはたえやし  
2731 ぬらん

これは北野の御歌となむ

次に『新拾遺集』（一三六四年成立）に一首見える。

卷第十六 神祇歌

1385 紅にぬれつつけふやにほふらんこのはうつりておつるしぐれば  
亭子院ならにおましましける時、たつた山にてよませ給

ひける北野の御歌となん

『新拾遺集』は『続古今集』より約百年後の成立であるにもかかわ  
らず、『続古今集』における道真歌の扱い方を踏襲しているといつて

よい。

また『新続古今集』（一四三九年成立）にも次の一首が見える。

卷第二十 神祇歌

2079 花もさき紅葉もちらす一枝はふきなす風をいかがうらみん

これは北野の御歌となん

このように『続古今集』を契機に歌人としての道真も神格化され、  
その後の勅撰集もこれに倣つていったのである。

おわりに

道真については天神信仰の影響もあり、和歌の神様としても既に  
尊敬を集めていたことは否定できないであろう。結果として、『続古  
今集』の完成は『古今集』『新古今集』の成立年、道真の生誕の年と

干支を同じくしたいわば記念の勅撰集になった。特に『新古今集』  
は「はじめに」でも触れたように道真歌を十六首も採っており、道  
真に敬意を表しているといつてよいであろう。すなわち『続古今集』  
の道真歌の扱いについては、後から撰者として加わった光俊たちが  
為家の単独作業に反発し、反御子左家としての考え方を反映させて  
いった一つのかたちという見方もできるのではないだろうか。

〔注〕

(1) 武井和人氏「勅撰集にとられた道真歌」、『芸文東海』巻号二、一九

八三年二月。

(2) 右に同じ。

(3) 和歌の引用は全て『新編国歌大観』に拠る。

(4) 樋口芳麻呂氏執筆「万代和歌集」、『日本古典文学大辞典』第五卷、

一九八四年、岩波書店。

(5) 『続古今集』の「真名序」「仮名序」の引用は『新編国歌大観』に拠  
る。

——やまぐち・まさよ、広島大学大学院博士課程後期在学——